

女性の視点から レディース・フォーラム



町では、女性の視点からの声を大切に、住みよいまちづくりをすすめています。

8月4日(木)、豊明館多目的ホールで『レディース・フォーラム』が開催されました。出席された皆さんは、女性の声としてさまざまな意見や要望を町に伝えていました。それでは、フォーラムの様様を一部ご紹介いたします。

ングを主体とする農業の町であります。地形的には津軽のほぼ中央に位置し、交通網の利便性から隣接市町の各種企業等に通勤可能な恵まれた住環境を持つております。

このことは、農業に限らず様々な分野で隣接市町の雇用を享受できる範囲に位置付けられていることとなります。

次に「住」であります。町では公営住宅の建設に昭和46年から取り組み、建設された総戸数は261戸に及んでおりますが、経年による老朽化や今後の需要を見据えた建替計画を予定しております。そして若者が定住し、安心して子育てができるよう保育料の負担軽減を図り、休日保育の実施など働く母親に配慮した福祉施策に努めており、若いカップルが少しでも当町で安心して生活ができ、子育ての出来る環境づくりを目指しております。

これらを踏まえ、今の若者はどちらかといえは、車社会の進展により地元地域つきあいよりも職場つきあいが多くともいわれておりますが、地域の出会いを築く意味で地元開催の各種イベントにボランティア等で参画していただくなど出会いや、きつかけづくりの機会を多く設けることも一例かと考えられます。

定住施策等については、それぞれ担当課長からも説明がありま

A・産業観光課長

町の主要な産業である農業もまた、農業後継者の減少のため、後継者の確保と同時に、伴侶の確保もまた望まれることでもあります。

そのため、つがるにしきた農協青年部では、第10回「待つより探す運命のひと 婚活宣言」と題して、先日23日に「森のレストラン ライオン地球村店」で婚活イベントが開催されたところです。

伴侶の確保のためには、出会いの場が必要になりますが、農業従事者の場合、出会いの場が極めて少ないのが現状でありますので、このような企画には、自らが積極的に参画していくことが望まれるところであります。

A・町民生活課長

町民生活課では、少子化対策と子育て支援の一環で児童育成支援金の給付や保育料の軽減、乳幼児医療費給付など実施しています。

現在、県が主体となり、結婚を希望する男女を公的に支援する「あおもり出会いサポートセンター」が7月から業務をスタートしており、会員登録者にイベント情報を提供したり、婚活セミナーを開催していくことになっております。

町独自に対策を考えることも必要ですが、今後はセンターと連携しての活動等も考えられますし、より幅広い視野での結婚活動が期



待されます。

一人でも多くの方が結婚できるよう、町としても未婚者等にセンターの活用方法やセンターの情報等を広報等でお知らせしたいと考えています。

Q・ゴミの減量化に取り組んでいるところですか。

以前に比べると燃やせるゴミが増えてきたこと、そして燃やせないゴミも増え、分別が少ない分、町民は生活しやすくなりましたがそれでもいいのでしょうか。リサイクルのゴミをもう少し増やし、地球に優しいリサイクル生活を考えてみてはと思います。

A・町民生活課長

現在、ゴミの分別については、燃えるゴミ、燃えないゴミ、資源

Q・年々町民数が減少していることに心痛みます。毎年一組でも多く若いカップルが誕生することを祈っていますが、そのためにはどのような対策を企てたらよろしいのでしょうか？

A・総務課長

次世代を担う子どもたちのた

めにも、多くの若者達がこの町に生活の場を持てるような住みよい環境づくりが大切かと考えます。なかでも基本となる生活の3要素のうち、「食職」、「住」そして「児童福祉対策」が重要なことと

「職」は食べる＝職業に繋がる生活の基本であり、当町は米と



ゴミのたい肥化推進など検討しています。

同時に、町内会や子ども会など各団体による資源ゴミの集団回収の拡大を図るとともに、リサイクル品のストックヤードの確保など検討しています。

いずれにしてもゴミの排出量抑制と適正分別には、町民のご理解とご協力が必要ですのでよろしくお願ひします。

Q・朝ごはん条例は、食育としてとても大切でしっかり食べさせています。ただ、給食に関して、時々パンや麺類も食べさせてあげたいと思います。自分たちが小さいときに食べていたパンや麺類を今でもおいしかったと思います。ところがありません。でも、今はそれがなく、寂しく思います。

米は日本人の大切な食文化であります。月に1、2回でもパンなどがあれば、より楽しい食事になると思います。あるじゃや米粉パンも販売されていますので、鶴田町の特産を給食に出しても良いのではないかと思ひます。

A・教育次長

朝ごはん条例の趣旨をご理解いただき、実践して下さっていることに感謝申し上げます。月に1、2回でもパンや麺などがあればと

のことでございますが、町としては、米の食文化を大切にすることも、米の消費拡大や地産地消などさまざまな面から米を食べることの意義を見いだしていきたいと思っております。

Q・これから年を取ってきて、病院が遠くなるのが心配です。長生きが幸せに思えるような世の中でありたいと思ひます。

A・町立中央病院事務長

「病院が遠くなるのが心配」との意見でございますが、現在の鶴田町立中央病院が広域連合立の診療所になりますので、今後の鶴田病院の方向・地域医療のあり方について説明させていただきます。

県では医療機能の再編を進めていて、鶴田町は五所川原市、つがる市、鰯ヶ沢町、深浦町、中泊町との2市4町で西北五地域保健医療圏の枠組みの中にあります。この地域で5つの公立病院がありますが年々常勤医師数が減少しています。今の状態が続いていけば、経営的にいずれ5つの病院が共倒れするかもしれないし、医師がいなくなってしまう、病院そのものが成り立たなくなってしまう。

こうした状況を防ぐために西北五地域が一体となって医療機能の役割分担を進めていこうということ、連合立・中核病院・サテラ

イト病院、サテライト診療所という計画を進めています。具体的には、五所川原市に三次医療を担える高度の医療機能を持った地域全体の中核となる総合病院を建設し、医師確保、医師の集約を図ります。鶴田病院とつがる市成人病センターをサテライト診療所に、鰯ヶ沢病院と金木病院は回復期の入院とへき地医療拠点のために100床を残しサテライト病院にするというものです。

鶴田診療所は現在の病院敷地内に新築する予定です。内科中心の診療科になりますが、午前中は内科医2人で初期医療の提供、かかりつけ医機能、予防接種・住民健診への体制を確保し、レントゲン・CT等の医療機器も最新式のものを導入し外来診療の充実強化を図っていきます。

確かに、ご意見にあるように入院施設がより自宅の近くにある方が安心できるという考えは理解できますが、鶴田では一番遠いところで約10km、車で19分以内で総合病院に着くこととなります。逆に考えれば今まで太学病院や県病まで行かなければできなかった治療も五所川原市でできることとなります。また、診療所への送迎バスについてはこれまでどおりの運行を予定しています。病院が遠くなるという言い方ではなく、より高度な病院が近くにできると考えていただきたいと思います。

長生きが幸せに思えるよう、町では健康が一番の幸せと考え、健康長寿の町を目指していろいろな保健事業も実施しています。早期発見早期治療で重症化しないよう、回復を早めるよう健診率ナンバーワンに向けた取り組みもその一つです。また、弘前大学の協力を得て、胃がんゼロに向けた事業も立ち上げる予定になっております。

医師を含め、限りある医療資源を有効に活用して、老後がより安心できる地域社会を作っていきたくて考えておりますので、どうか「病院が遠くなる」ではなく、「県病や大学病院のような高度な病院が西北五地域にできる、初期医療・かかりつけ医は新しい診療所が十分に提供してくれる」と理解していただきたいと思います。

